

平成26年度 第50回「わたしの教育記録」

担任の立場をいかした 小学校外国語活動

岡山県倉敷市立玉島小学校教諭 江尻 寛正

はじめに

平成25年12月13日に文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表された。計画とはいえ、高学年で週3時間という時数に私自身は驚いた。外国語活動の必修化が決まった時に現場では、「私は英語を教えなくていいから小学校教員になったのに……」「英語の免許を持つてないのに教えていいの？」という声があちこちから聞こえていたからである。それが数年後に3倍の時数になるかもしれない。多忙化を極める現場からは悲鳴が聞こえそうである。

しかし、教える子たちが社会に出る頃には、今以上にグローバル化が進むことを考えると、英語教育の充実は避けて通ることはできない。その現実があるので、必要性は理解している。問題は、誰がやるかである。

文部科学省は「英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用」と提案している。つまり、学級担任を基本にして考えるということである。決定したことに従うのが現場の責務であるが、それでモチベーションが上がるものではない。では何が必要か。多忙な中であつても与えられた役割に真摯に取り組む気持ちにスイッチを入れるのは、やはり担任自身が授業する良さを自覚できることであろう。

そこで、本論文では、私の10年を超える外国語活動の経験をふり振り返りながら、「担任の立場をいかした外国語活動」についてまとめていきたい。担任だからこそ子どもを伸ばすことができるという視点でまとめることで、外国語活動が教科になったり時数が増えたりしても、「担任の自分が子どもたちのためにできることがある」と、現場の教員が意欲と自信をもって研修と授

業に臨めるきっかけに、本論文がなればと考えている。

担任だからこんなことができる

私は外国語活動にかかわり始めた当初から、担任が中心になって進めることが大切だと考えている。厳密に言うとその根拠は少しずつ付け足されている。端的に記すと次のようになる。

昔 ○クラスコントロール

○子どもの興味・関心

○他教科の学習をいかす

○主体的に学ぶモデルになる

○一日の生活全体の中で力をつける

現在

これらに優先順位があるわけではない。そこで、私が意識し始めた順に説明をしていきたい。

クラスコントロール

10年前にはこの点を最も重視していた。当時は外国語の授業はALTや地域の英語が堪能な方を中心に行うことが多かったので、担任は落ち着かない子を静めたり、ゲームに熱中しすぎて起るトラブルを解決したりすることが役目であった。

子どもの興味・関心

担任は長い時間を子どもたちと過ごしている。すると、子どもたちが好きなことや興味があることが分かってくる。それを授業に取り入れることができる。具体的に Family を扱う単元で考えてみよう。

妹や兄、父や母の英語での言い方を学ぶ時に絵カードを使う。担任は、それにどんな絵を使えば適当かを工夫することができるのである。当時、ALT が作ったカードはコンピュータソフトのイラストであった。しかし4年生の担任は、研究授業で「ちびまる子ちゃん」の家族を使ってカードを作り、子どもの意欲を引き出していた。また、その年の5年生担任は、感情表現させるキャラクターとして「ワンピース」の絵を使っていた。「ワンピース」のアニメは今ほどメジャーでなかったのですが、子どもたちとよく分らないものだったが、子どもたちの反応は抜群であった。子どもの興味・関心を一番知っているのは担任だと実感した時であった。

他教科の学習をいかす

小学校の担任は基本的に全教科を教えて

いる。だからこそ、他教科の学習をいかすことで、外国語活動の学びを広げたり深めたりすることができる。一般的には、他教科で学んだ内容を外国語活動で行うということが多いが、視点が違う取り組みを二つ紹介したい。

一つは、3年生の授業である。算数科で図形の名称を学ぶが、算数科で学習する前に外国語活動の中で形 (shape) を扱った。同じ四角でも、square と rectangle というものがあるんだと子どもは気づくわけである。定義を教えなくても、4時間単元の中で何度も見て発話するうちに、違いが分かってくる。そのうえで算数科の授業を行うのである。二つの四角は名前が違う、形のイメージも意識できているので、算数科の図形の学習にスムーズに入ることができた。実際、算数科の導入では子どもたちの口から英語の名称が出てきていた。英語を日本語に訳すような授業になったわけである。

二つめは、6年生の color と food をテーマにした授業である。この時は、ALT と私とゲストティーチャーの栄養士と3人で授業を行っていた。栄養士が白黒のイラストを見せ、色を問うていく。最初は順調に進むものの……牛乳のイラストを見せ、

「What's color?」と聞き、それに対して、私とALTが「Of course, Milk is white.」と答えた。その後子どもたちに聞くと、口々にいろいろな色を答えた。栄養士は「Is...」と言って、「red」と答えを言う。子どもたちからは「えーっ」と声が挙がったが、私が「分かった。うちの学校は給食でメグミルクが出るからやな」と言うと、笑いながら少し落ち着いた。

次に栄養士が出したのは豆腐のイラスト。「It's white.」「It's yellow.」といった答えが出るものの、栄養士の口から出た答えは「It's red!」。またしても、子どもたちからは「えーっ」「なんで?」の声。次の問題が「Bread is...」。この時に、ある男の子が「あつ、分かった!」とつぶやいた。そして、隣の女の子と声を交わしながら、自分の机の中をさぐり始めた。まわりの子は一体なんのことか分かっていなかったが、何かあったという雰囲気になり、「あつ、そういうことか」という声がまわりからも出てきた。そして、同じように机の中を探す子が増えていった。

出された物は……家庭科の教科書であった。栄養士が問うていたのは、栄養素の色だったのである。この実践は、他教科で学

んだことを、子ども自身がつなげる。ように仕組んだものである。昨今さかんに言われている活用力が発揮された学習である。他教科の学びをいかす授業は、外国語活動で取り入れやすく、それができるのは他教科も教えている担任だからこそであろう。



主体的に学ぶモデルになる

一部の英語が堪能な教師を除き、多くの小学校教師にとって英語は難しいものである。だから、「分からないから教えられない」となりがちだが、「分からない時にはこうすればいい」ということを教えることができる」のが外国語活動であると考えている。例えば、私が5年生担任で animal の授業をした時、「先生、アライグマって何て言うの?」と聞かれたことがあった。

しかし私には「ラスカルじゃないし……」という答えしか出なかった。そこで、授業後に図書室に一緒に行き、子ども用の和英辞典を開いて調べた。

するとこの子が、「教室に持って行っていい?」と聞いたので、「いいよ」と答えた。教室でその子が辞典を開くと子どもがどんどん集まり、「へへ、キリンはジラフって言うんだ」と多くの子が興味津々で読んでいた。この様子を見て、思わず自分の言動を反省した。国語の授業を中心に「分からないことがあったら辞典で調べましょう」とよく話していた。しかし、行動にする子はあまりいなかった。これは私自身が行動していなかったからではないかと考えたのである。そこで私は辞書を手元に置き、曖昧な言葉はことあるごとに子どもの前で調べるようにした。すると、子どももどんどん辞書を使うようになったのである。

これは、外国語活動のコミュニケーションの場合でもそうであった。名称が分からない場合、その場で私が「How do you say ~ in English?」と A L T に聞いたり、ジェスチャーで伝えようとしていたりするようにした。そうすると、子どもも A L T とかわかる場面がどんどん増えていった。受動的で

教えられる立場だった子どもが、主体的に学ぶ子どもに変わっていったのである。これは、私の教育観を大きく変えた。主体的に学ぶ子どもを育てるなら、知識だけではなく、学び方を教えることが大切だと実感できたからである。どうすれば人とかわることができるか、分からないことがあった時にどう学ぶかといったことを、自分がモデルになって伝えることができるのが外国語活動であると思う。

一日の生活全体の中で力をつける

コミュニケーション能力の素地を養うことが外国語活動の目標である。しかし、コミュニケーションは外国語活動だけするわけではない。一日のあらゆる場面で行われている。小学校の担任は一日のほとんどを子どもと共に過ごしているのだから、素地を養う機会が数多くある。考え方によっては、週に一度の外国語活動の授業以上に、生活面でのかわりの方がコミュニケーション能力の素地を養うことに影響を与えていくであろう。それを意識しておくことが大切だと考える。

例えば私の学級では、朝の会で次の事項のようなペアトークの時間を設けている。

- ・曜日ごとにテーマがある。
- ・隣の人とペアで行つ。
- ・一方は聞き手、他方が話し手。
- ・1分間続けることが目標。交代で行つ。
- ・最後はくじ引きで発表者を2人決める。
- ・「江尻くん」が選ばれた場合は、江尻くんの話を聞いたペアの人が、「江尻くんの昨日の食事は……」という発表をする。



このペアトークでは、アイコンタクトや笑顔、うなずきといった「反応」を大切にするように声をかけている。また、最後の発表は自分のことではなく、ペアの人の話をさせている。一方的に話すことよりも、**相** **手** **意** **識** をもって聞き合うことがコミュニケーションの開始前に日直がサイコロを振っている。1の目が出た場合は、「話し手は日本語禁止」というルールを作っているのである。これは子どもたちに大人気である。1が出た場合は通常以上に盛り上がり、英語

を使ったりジェスチャーを使ったりしながら、必死に**自分の思いを伝えようとする姿**が見られる。まさにコミュニケーション能力の素地を育てている実感がある。

反応、**相手意識**、**自分の思いを伝えようとする姿**は、外国語活動で大切にされる要素である。これらを朝の会でも行うのである。朝の会は毎日行っているのだから週に1回の外国語活動だけで行うよりも教育的効果が高くなる。また、ここで育てた素地を他教科の話し合い活動にもいかしていくことができる。これも、全教科を教え、生活面までかかわっている担任だからこそできる教育活動であると考えている。言語活動の充実が大切にされているが、外国語活動はその中で行われること以上に、他へつながる部分が多いように感じる。

現在の授業の様子

では、現在の1時間の授業の流れはどうなっているのか。前述した5つのポイントを取り入れつつ、さらに深化させながらページの指導案のようになっている。

例えば**Point**①である。朝の会のペアトークで意識させている反応を英語で行っている。これは毎時間の帯活動として行

っているので自然に定着していて、他教科でも「Me, too.」といった声が出るようになっていた。ALTからも「英語でのリアルなコミュニケーションになっている」と評価されている。

Point②は、他教科での学習の進め方をいかしたものである。ある小学校教師が理科で天気学習をする際、単元導入の時に「めざせ気象予報士！ 遠足の日の天気予報を自分でできるようにしよう」と話していた。教科書の学習をただ順を追って進める場合と比べると、子どもの意欲に雲泥の差が生まれるのは明らかである。

外国語活動においても同様である。文部科学省の調査（平成21年）においても「英語が使えるようになりたい」と答えた割合は8割を超えていた。外国語活動は聞く・話す活動が中心とはいえ、英語のフレーズに親しんで終わるものが多いように思う。そこで次ページのワークシートを工夫し、子ども自らが英語の使用場面を主体的に考えていけるようにし、それをスキットにして表現する場を設けるようにしている。

Point③として、今年度は年間を通しての目標を子どもと共通理解しているということがある。コミュニケーション能力

時	児童の活動	指導者の活動	活動の種類
3分	あいさつ	全員にあいさつをした後、数名の児童にあいさつをする。児童によって返す答えが違うことが予想されるので、それぞれに合わせて反応（内容に対する反応、英語面の評価）をする。それにより、形式的ではない、意味のあるコミュニケーションにしていく。	T-SS T-S
5分	Who am I? クイズに答える。	クイズをすることを告げる。4月に書いた自己紹介シートを読み上げ、それが誰のことを尋ねる。分からない場合にはヒントを出す。最初はシートの内容について自己紹介をする時間を設ける。	T-SS
3分	自己紹介をする。 ↑ Point ③ ↓ Point ③	最初は指導者が行う。その際、反応の仕方を確認しながら行うようにする。反応の場面を取り入れることで、聞き手が言葉を意識して聞く手立てにする。また、話し手にとっては相手に言葉が伝わったという実感をもつことができるようにする。 "Oh, ~." "Me, too." "Really?" ← Point ①	S-SS
5分	指導者の質問に答える。	"What food do you like?" を使って全員に尋ね、その後数名の児童に質問をする。その時にもまわりの反応を意識するように声をかける。	T-S
20分	3answer ダウトクイズを作る。	"What food do you like?" という問いかけに、"I like ○○" を使って3つの食べ物に答える。そのうち1つに嘘を混ぜ、まわりに "Guess" させるデモンストレーションを見せる。	T-SS
4分	3answer ダウトクイズを出す。	リアクションの仕方を確認して、行うように促す。 Point ②	S-SS
5分	ふり返り	どんな場面で今回の表現 "What food do you like?" を使うことができるか考えさせ、それをスキットにする。それを第4時の劇化につなげていく。最後に、感想や気づいたことを書くことを指示する。	T-SS

※ T → Teacher, S → Student (個人), SS → Students (集団) で、それらの関係を示す。たとえば T-S は教師と児童の個人のかかわり、S-SS は、児童個人と集団のかかわり。

(ワークシート)

Aa Bb Cc Dd Ee Ff Gg Hh Ii Jj Kk Ll Mm Nn Oo Pp Qq	
月 日 No. NAME	【ふりかえり】 ○よくできた! ○できた! △次こそ!
	①英語の授業に興味をもって参加しましたか。 []
	②英語をすすんで聞いたり話したりしようとしたか。 []
Teacher talk	今日の英語が使えるような場面は?
	今日の学習で気づいたことや考えたことを書こう!
Rr Ss Tt Uu Vv Ww Xx Yy Zz	My Dictionary

の素地を伸ばそうという言葉では、なかなか子どもには伝わらない。そこで、具体的に全員にめざしてほしい目標として「英語で自己紹介をすることができると、チャレンジ目標として「A L T」と1分間英語で会話が出来る」を挙げている。

目標を子どもと共通理解しておくことで、1時間ごとのねらいはもちろん、細かい活動自体も最終目標とどうつながるか子ども

も自身にイメージできるようになる。指導者側も最終目標につながる活動を帯として取り入れたら、つながりを説明したりできる。

実際、年度当初に「A L Tの先生と1分間英語で話をする」ということを提案した時には、「えっ、絶対無理」という声が多数を占めていた。しかし、7月の時点で半数の子どもが「1分間だったら話ができ

そう」と答えていた。「英語が使えるようになりたい」という子どもの意欲を授業の中で具体的な取り組みとして取り入れ、自分が英語を使っているイメージをもたせることができた成果だと考えている。

まとめ

10年の取り組みの中で考えたことを簡単にまとめた。外国語活動が必修化になって

いる今では、意識せずに行われていることもあるであろう。しかし、あらためて整理しておくことで、担任が外国語活動を行う良さが再確認できると考えている。

また、まとめることで私自身が気づいたこともある。それは、外国語活動の授業は特殊なもののように感じるが、小学校教育という視点から見れば、他の教科と変わらないということである。例えば、「他教科の学習をいかす」。社会科学見学に行ったまとめを、国語や書写で学んだ新聞の書き方を使って「社会科学見学新聞」にすることはよくある。図工科で考えたオリジナルのマイキヤラを使って、ノートまとめを楽しくすることもよく行われる。また、私が前項で挙げたPoint②③のように、学習の目的を子どもと共通理解しておくことは、どの教科の学習においても大切であろう。教師が過剰に構えることなく取り組むことができればと思う。

外国語を使ったコミュニケーション能力の素地を育てるのが外国語活動の役割ではあるが、素地自体を育てるのは、一日の多くを共に過ごす担任だからこそできることである。そしてその担任が外国語活動を行うことで、より目標に近づく指導ができる

と考える。最近是人とのかかわりを苦手にして子どもが増えてきているように感じるが、外国語活動の時間だけでコミュニケーション能力の素地を育てることは、砂

受賞の言葉

岡山県倉敷市立玉島小学校教諭

江尻 寛正



この度は、栄誉ある賞をいただき大変うれしく思っています。外国語活動が教科になるという提言が出され、困惑する現場教員に「自分の経験が少しでも役に立つならば」という思いで書いた論文でした。しかし、「自分の経験」と言いつつ、歩んできた道には多くの支えがありました。

10年以上前、「小学校で英語？」という時代の中、手探りで共に研究を進めた東京都大田区立池雪小学校の教職員の方々。渋谷で餃子を食べながら、英語活動のおもしろさを教えていただいた昭和女子大学の小泉先生。小学校英語だけではなく、英語教育全体を見て広い視野から考えることを教えていただいた大阪樟蔭女子大学の菅先生。子どもの姿を見て授業を進める大切さについて叱咤激励をいつもいただく文部科学省

上の楼閣にはかならない。担任がその立場をいかして外国語活動に取り組むことが、外国語活動の充実ならびに小学校教育の充実につながっていくと私は考えている。

教科調査官の直山先生。ユーモアと豊かな発想に刺激をいただいている関西大学初等部の梅本先生。そして誰より、共に授業に取り組んできた池雪小学校・サンパウロ日本人学校・玉島小学校の子どもたち。たくさん支えがあつてこそ受賞だと思っています。本当に感謝しています。

今のクラスの子どものこんな作文を書きました。「江尻先生の口くせは、失敗したらいんだよ」です。いつも言ってくれるので、わたしは『がんばろう』って思えます。「この言葉の通り、私は失敗を繰り返してきた人間です。でも、あきらめずに『がんばろう』としてきました。『失敗』してもそこで終わらせず、立ち上がって進めば、それはいつか『経験』というものになるからです。本論文が、外国語活動が教科になったとき、立ち止まったり倒れたりしそうな方の支えや進む方向の示唆に少しでもなれば、これほどうれしいことはありません。私の失敗と経験が、誰かの役に立つことを心から願っています。」